

「初心のうた」は、全5曲からなる混声合唱組曲として、2002年にエオリアン・コールにより委嘱・初演され、以来、十数年に亘り、日本の合唱界で歌い続けられている、まさに名曲と呼ぶに相応しい作品です。

テキストは、現代日本を代表する詩人・文学者の木島始さんの詩が使われています。

17歳で敗戦を迎えた木島さんは、2004年に亡くなるまで、膨大な文学作品を発表されましたが、そのすべての作品の底に流れる思想は、人への限りない優しさ、特に社会的に弱い立場におかれた人々への暖かい眼差しでした。国家から戦争に動員され命を落とした人たち、いわれもなき差別を受けた黒人たち、社会の様々な矛盾の中で歴史に埋もれていく人たちの代弁者でした。

作曲された信長貴富さんは、日本の合唱界から圧倒的な支持を得ていることは言うまでもありませんが、私が特に強く惹かれるのは、その作風が木島さんの創作姿勢と相通じるところが大である点です。

すでに多くの名曲を生み出しておられますが、どの曲も、人の命の尊厳、愛することの素晴らしさ、平和の尊さ、自然への畏敬、それらが強大な権威とは全く無縁の、慎ましくも精一杯、生きようとする人間の熱い血の通った歌声として表出されていることに、私は心底、しびれます。

本日の「初心のうた」も、その大河の源流とも言うべき作品だと思います。去年は戦後70年でしたが、それを過去のこととしてはならない、という強いメッセージを感じます。私は日本の「第九」だと思っています。

1. 初心のうた

「まちや くにの しくみを / ころしや つくり かりたてる くにと ひとの しくみを / ひとり ひとり つきとめよう」、そして「ゆめを うごかす」「はぐるまを まきなおそう」と歌われます。そう、まさしく「初心」に帰って。そして木島さんは第二次大戦の戦禍を踏まえて「アジアの かがみに うつる わたしたちの みらいを」「つきとめよう」とも。70年経った今なお、アジアの国々と良好な関係が築ききれない私たちの、そして世界の愚かさを木島さんは天国から告発しているかのようです。

2. 自由さのため

私たちは当たり前のように「自由」だと思っています。しかし同時に、人はその「自由さ」故に「酔いつぶされ」てしまう危険性を持っていると言えるでしょう。これまでの歴史の繰り返しの中から得られた教訓なのかもしれません。木島さんは、鋭く指摘します。「手ごわい敵である 自己に耳傾けよう」と。これを爽快な音楽に仕立て上げたところが信長さんの面目躍如というところでしょうか。

3. とむらいのあとは

この曲だけが無伴奏です。死んだ兵士の弔い。生き残ったものは、死者の無念を押し量るすべもありません。ただ「銃よりひとを しびれさす ひきがね ひけなくなる 歌」を「ゆめみよう」と歌われます。この曲をはじめ聴いた時、第一次大戦中の史実に基づく映画「戦場のアリア」のことを思い出しました。戦場に流れた歌がもたらした奇跡のようなクリスマスの日の停戦、翌日の最初の弾は、いったい誰が放ったのでしょうか。悔しさがつのります。そして、私たちの歌もまた、ささやかながらも、戦いを中断させる力を持ち得るはずだと信じたいです。

4. でなおすうた

木島さんが「1947・48年」という副題を付けた詩「大學」がこの曲のテキストの原型。1953年に発表された「木島始詩集」の最初の方に掲載されています。学徒動員された学生が命からがら戦場からキャンパスへと帰還してきました。死から生へと帰還してきた喜びと安堵、そして未来への希望。ところが、この詩は後に変形され、最後の一行「わたしたちは帰還した」に「はずだった」が付け加えられました。つまり「わたしたちは帰還した はずだった」と。この一行ほど、世界の戦後70年を端的に言い表した文章は無いのではないのでしょうか。

5.泉のうた

植物は、この世に生え出た時、地上に出た茎は、地下の根は、どこへ向かおうとするのでしょうか。木島さんは言います。「大きな 太陽が 夢を きめる」、「どこまでも 清水をもとめ」と。そして「未来へ とおく はるばると」「じぶんの 泉を さがし 手にいれよう」と。

清く美しい水を湧出する泉、どのような道筋を辿れば、そこに行き着くのか、何を頼りに歩けばよいのか。それは容易なことではありません。しかし、諦めない。そして「とおくまで 歩ける足が」無数に歩き続けることによって「ひろい道」ができると歌われます。

またまた私情で恐縮ですが、私はこの歌を聴いた時、オリンピックの閉会式の様子を思い出しました。国を超えて、肌の色を超えて、宗教を超えて、すべての人々が笑顔でトラック上を踊り歩くあの光景は、クリスマス停戦とも相通じるユートピアに思えます。閉会式の会場から去ったとしても、その人は変わるはずはありません。しかし、社会や国や宗教という枠組みが、個々の人々の存在の意味を変えてしまう・・・。

たとえ誰も感じるできない程に微かであったとしても、私たちの歌で世界を変えたい。そんな「初心」で歌いたいと思います。